

碧南市哲学たいけん村無我苑 高北幸矢グラフィック展「増殖体都市」

建築と拮抗するグラフィックアート
高北幸矢 撮影／漆脇美穂

The Graphic Exhibition “URBAN MULTIPLYING BODY” by Yukiya Takakita
at Experience Philosophy Village “MUGAEN” in Hekinan.
“Graphic Art and Architecture rival”

Yukiya Takakita Photographed by Miho Urushiwaki

世界自然保護基金(WWF)のシンボルマークのパンダ、動物愛護の象徴的存在としてのクジラ、絶滅危惧種の代表としてのトキ、そうした生物よりも、道路の接合部や破壊部に芽吹く草、吹き寄せられたゴミに蠢く小さな虫に私は生とし生けるものへの慈しみを覚える。そしてそれらはコンクリートやゴミと一体となって、新たな生命体を形成し、増殖を繰り返して行く。私はそれを「都市の増殖体」と名付けている。

エコロジーについては、多様な視点の理解があるが、進化の下部層を構成し、増殖する生き物の生命力に最も強いメッセージを感じている。生命にとって過酷であるはずの都市、むしろ都市こそその増殖するエネルギーを培養しているのではないか、進化を促す装置ではないか。都市に増殖し続ける命は、都市そのものをまた生命体として増殖させて行く。

都市に住み、都市と向かい合う生活の中で、都市の中でこそ受け止めることのできるエコロジーメッセージを重要な表現テーマとしてきた。そして可憐な花もまた人間主体の愛玩物を超えて生命感に溢れた壮絶な命の業を見るようになった。

碧南市哲学たいけん村無我苑の企画展として個展を開催した。この建築は若山滋氏による設計で、個性的な造形が強いインパクトを与え、訪れた者を圧倒する。展示空間を持つ建築は、一般的に垂直水平のキュービックなスタイルを持って多くを主張しない。展示される作品が主役となることを前提としている。無我苑は、そのことを拒否するがごとく自らを主張し続けている。私は、この建築空間に150点のグラフィック作品(ポスターとシルクスクリーンによる版画)で挑んだ。コンクリートの隙間に根を宿し、やがては大草原に還元させんとする野草のように。

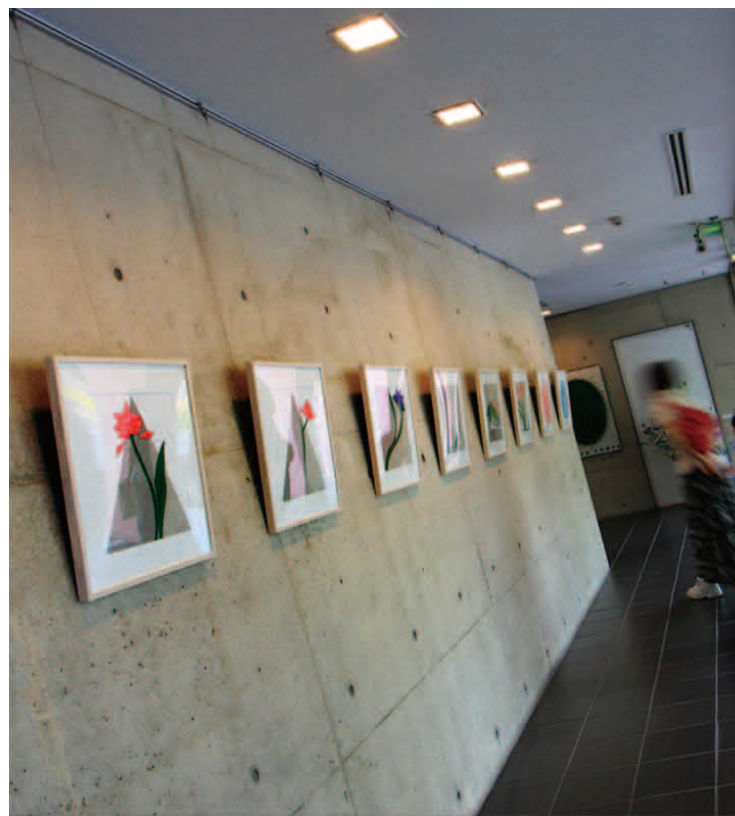
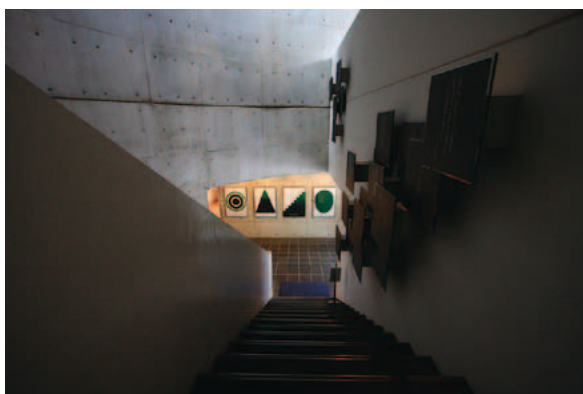
「増殖体都市」会期 2008年7月29日-9月28日

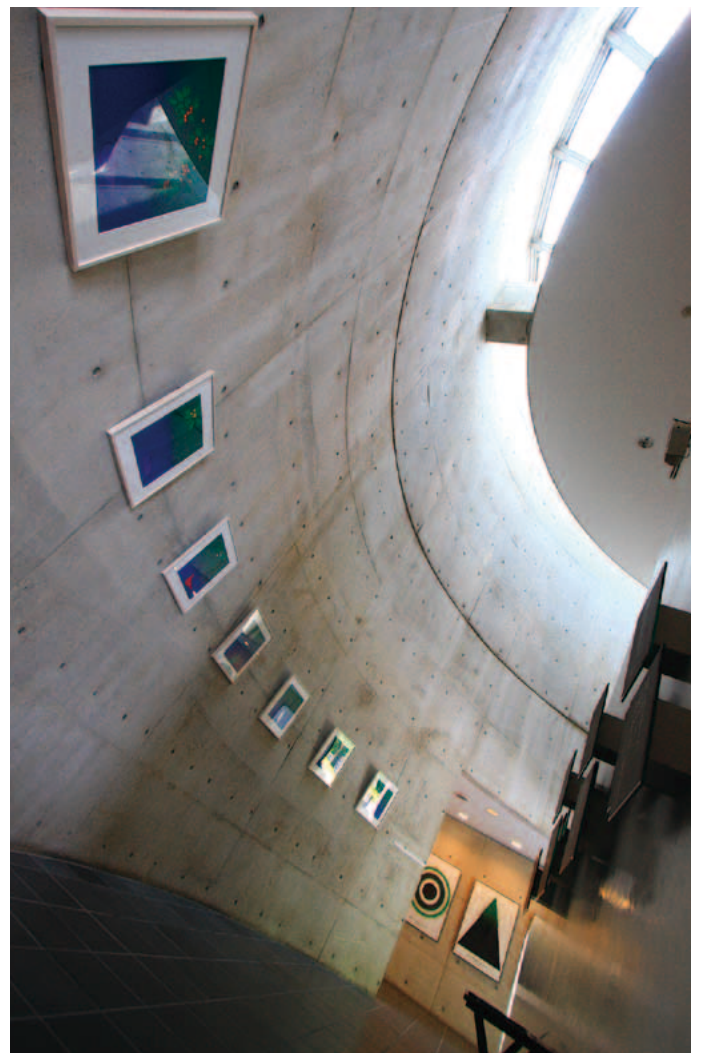


1F 一回廊

碧南市哲学たいけん村”無我苑”は、アプローチから展示作品が鑑賞できるように設計されている。さらに玄関を抜けた回廊空間は、ほとんどが展示可能な対応がなされている。

それは来館者が作品を鑑賞しようとする心構えができる前に、不意打ちのように作品が出現する。ここから鑑賞するという場が決められている訳ではなく、むしろ混乱を感じながら作品と向き合うことになる。私は、出現した視野空間を一つのギャラリーとして捉え、ギャラリー別に作品テーマを統一「高北幸矢A展」「高北幸矢B展」「高北幸矢C展」…というように展覧会群として構成して行った。





1F ― ギャラリー

一階の回廊空間を抜けて奥にギャラリーがある。面積約800㎡、展示壁約30m、ほぼ矩形の単調な展示空間である。

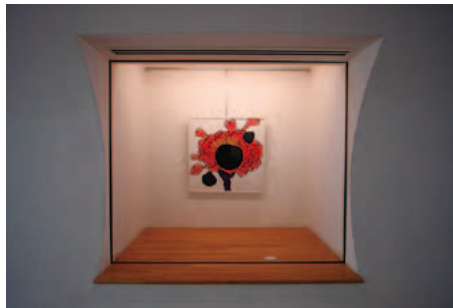
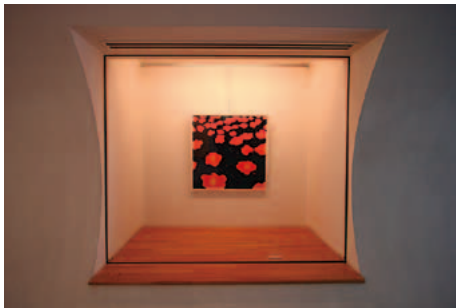
ここでは、これまで開催してきた「都市の増殖体シリーズ」「都市の増殖風景シリーズ」「DECOLOGYシリーズ」200点ほどのの中から33点の代表作を選び「高北幸矢ポスター展”増殖体都市”」を開催する。退屈な展示となることを解決することはできなかったが、ギャラリートーク、オープニングパーティを開催する空間としてハプニング的な見せ方を行った。



2F — 瞑想回廊

2階の瞑想回廊は、メディテーションルーム、リラクゼーションルーム、会議室があり、展示空間はそれらを結ぶ通路に設置されている。通路は、円筒形のパイプ状になっており、そこに嵌め込まれるように展示ボックスがある。天井高が低く、展示ボックスには柔軟性がない。作品は、収納されているという印象を持つ。

この2階瞑想回廊は、すべて75cmの正方形グラフィック作品を展示する。ガラスを通しての鑑賞は、来館者との距離を作る一方で、作品が熟成されるイメージを包含している。ギャラリーというよりは、博物館を訪れた印象を作る。一階展示空間のライブ感とは異なるタイプスリップした印象を与えることをコンセプトとした。



パフォーマンス

2ヶ月に及ぶ会期の初日から5日目、8月2日は、オープニングパーティ、ギャラリートークのほかにパフォーマンスを行った。

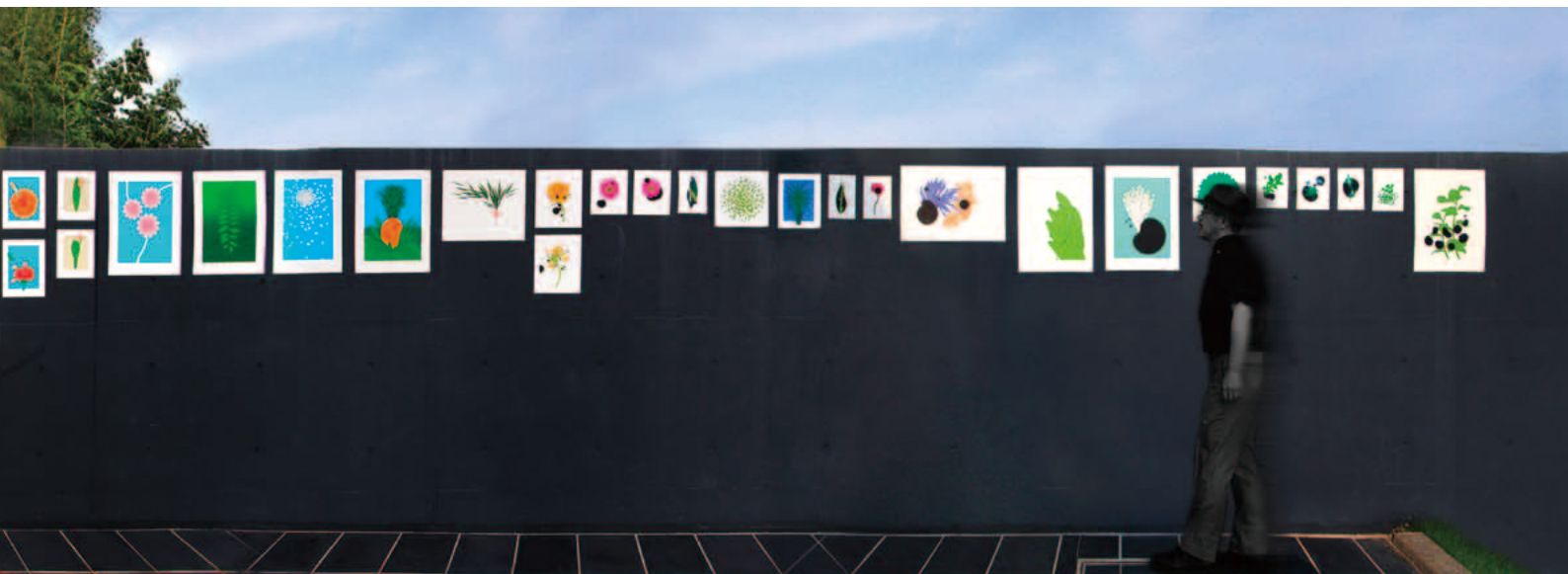
パフォーマンスは、エクステリアを引き締める15mに及ぶ黒い壁面である。具体的機能を持たない黒い壁面は、パフォーマンス展示を行うと、それは展示のために造られたのではと錯覚するようなものとなった。天候に恵まれたことが、パフォーマンスが大きな成功を収めるひとつの要因であったと思われる。



1F — ギャラリー／ギャラリートーク

碧南市の郊外という交通立地として恵まれていない会場で、多くの方に来館いただくためにはイベントが必要である。オープニングパーティのほかにギャラリートークを8月2日午後2時と4時、8月23日午後2時に計3回開催する。退屈な展示空間を熱いメッセージ空間に変容させる。





1F — ギャラリー／オープニングパーティ

8月2日午後5時、オープニングパーティを開催。交通恵まれていない会場に、この機会をめぐして100人を超える来場者を迎えることができた。

オープニングパーティは、その日の多くの来場者をきっかけに口コミによる展覧会広報を行うことが目的のひとつである。会期の限られた展覧会において、いつ始まっていつ終わったかが曖昧では、見逃される可能性が高い。オープニングパーティの開催は、初日周辺の日程にインパクトを置き、展覧会が盛大に始まったことを印象づける力がある。

